

編集後記

昨年秋からの原油価格の高騰に世界は揺さぶられ続けている。おりしも、暖冬の予想はあえなく崩れさり、今年の冬は例年のない厳しい寒さが続き、家庭暖房用の灯油は毎週値上がり続けた。この寒い時期に心暖まるすばらしい映画に出会った。昭和32、33年ころの日本が舞台で、三種の神器（テレビ、洗濯機、冷蔵庫）が出始めて、未来への夢が多かった頃の映画だ。家の中の電気器具といえば電灯、5球ラジオ、くらいしかなく、電力消費量は現在の1/10以下だった。デジタル家電に埋もれて便利な生活にどっぷりと浸かっている現代社会。ここで、1つ考えさせられた。今の石油文明…原油高騰の時にこそ、少しでもエネルギーを節約してみる。これは省エネの1つとしても貢献し、ひいては地球の化石資源の温存化にもつながる。身の周りの家電品の待機電力は、電力消費量の約10%といわれている。1家庭の電力消費量を平均300KWh/月とすると年間の待機電力は360KWhとな

り、日本の全世帯約4600万世帯とすると、165億6000万KWhとなり、石油換算では約265万トンになる。家電品のうち、せめて、テレビ、オーディオ、ビデオ、電子レンジなど家電品の30%の主電源スイッチをOFFにすると仮定すると、約80万トンの石油を1年間節約できる計算となる。待機電力を前提とするリモコン操作での電源OFFでなく、主電源スイッチをOFFする運動を提案したい。デジタル家電による便利な現代は、確かに生活は便利になっているが、生活の情緒が希薄になっている。昭和32、33年代の小学6年生だった子供時代にDNAのごとくメモリーに入力されたアナログ人間としては、煌びやかなショッピングモールで買い物していても、なぜか昔の沢山の駄菓子を扱っている店に足が向き、当時買ったお菓子を探し求めている自分を見て、思わず笑ってしまう。しかし、これが心の奥底を潤してくれるカンフル剤なのかもしれない。（藤崎、小沼）



「初夏に泳ぐ」

「平成17年6月、水戸市芸術祭（日本画）無監査」コード開発部 山岸耕二郎氏作品